

# ハンブルク学校改革運動における学校共同体の様相 —ペーターゼン校長時代のリヒトヴァルク校を中心に—

Die Schulgemeinschaft in der Hamburger Schulreformbewegung.

Ihre Konzept und Gestalt in der Lichtwarkschule 1920/21

小 林 万里子

Mariko KOBAYASHI

学校教育講座

(平成17年 9 月 27 日受理)

## はじめに

ペーターゼン (Peter Petersen 1884-1952) が1920年代半ば以降イエナ大学附属学校において取り組んだ学校改革実践の拠り所は, 1910年代からの田園教育舎とのかかわりとならんで, 19世紀末から20世紀初めにかけて活発な学校改革運動が繰り広げられたハンブルクでの教師経験であった。ペーターゼン自身, 『小イエナ・プラン』の冒頭で以下のように述べている<sup>1</sup>。

学校がその教育的な諸機能を真に発揮できるように, 昔ながらの学校現実を抜本的に改造するための実験をやってみようという意欲を私に与えたのは, 一九一二年秋のアンマーゼー田園教育舎の訪問であった。そして, イエナ・プランを実行する意欲を私に与えたのは, とりわけ一九二二年のドイツ田園教育舎に関する研究であった。加えて, ハンブルク生活共同体学校での長年に渡る私自身の実践的经验, 観察, そして教師団のなかでの討議があり, 私にとってそれらはことごとく基本的な意味をもっていたのである。

1909年秋からイエナに移る1923年までを, 中等教育学校教師としてハンブルクで過ごしたペーターゼンは, 教育改革を志向する学校改革同盟の理事を務めたり<sup>2</sup>, モイマンが設立した青年学研究所に参加したりするなど, さまざまなかたちで改革教育運動に関与していた。なかでも特にリヒトヴァルク校での経験は, イエナ・プランに大きな影響を与えたとされる。

ハンブルクで唯一, 中等教育段階での実験学校と認可されたリヒトヴァルク校は<sup>3</sup>, 1920年4月に校長としてペーターゼンを迎えた。民衆学校を中心とするハンブルク学校改革運動に触発され, 「新しい教育」を希求する中等教育学校教師たちがリヒトヴァルク校に集まったものの, その理念を具現化するためのヴィジョンを共有できていなかった。多くの教師たちがそれぞれの主張を語り, 教育活動を展開するばかりで, 「新しい学校」像が不鮮明であったという。このような状況を打開するためにも, 確たる学問的基盤の上に「新しい教育」を推進する人物とみなされたペーターゼンは, リヒトヴァルク校の教育理念の構築者として期待されたのである<sup>4</sup>。

ペーターゼンがリヒトヴァルク校でどのような教育実践をおこなったか、また、その背景にどのような教育観があり、実践を通じて彼の教育思想がどのように変わっていったかという点に関しては、これまであまり検討されていない。リヒトヴァルク校での三年間の実践については、イエナ・プランの前史として意義づけられるにとどまったからである。だが、ペーターゼンの教育思想において「共同体 (Gemeinschaft)」が一貫して鍵概念であったことをふまえるならば<sup>5</sup>、彼の「共同体」理念の構想や学校実践に沿いながら、リヒトヴァルク校における教育の内実を明らかにする必要がある。さらに、ペーターゼン思想のなかの「共同体」と、実際につくられた「共同体」とを精査することも肝要である。ペーターゼンにおける「共同体」を微視的にとらえていく作業が求められるだろう。

以上のような研究課題を設定したうえで、本稿では、ペーターゼンの校長時代にリヒトヴァルク校において構想された「学校共同体 (Schulgemeinschaft)」に焦点を当てる。なかでも、保護者との連携、学校間の連携に関わる側面について明らかにすることを目的とする。考察の手順は次のとおりである。まず、1919年以降に相次いで設立されたハンブルク実験学校としてのリヒトヴァルク校について概観する。次いで、リヒトヴァルク校における教師と保護者および地域社会との連携について整理する。そして、リヒトヴァルク校を中心として結成された「ヴィンターフーデ諸学校共同体 (Schulengemeinschaft Winterhude)」の活動について、リヒトヴァルク校の報告書やペーターゼンの評価を交えて明らかにする。最後に、リヒトヴァルク校において重視された保護者や地域の人々の学校参加ならびに学校間連携の意義を考察する。これらにより、「共同体」理念をはじめとするペーターゼンの初期思想を、彼自身の実践に照らし合わせながら究明する手がかりを得たい。

## 1 ハンブルクの実験学校

### (1) 初等教育段階

19世紀末以降、芸術教育運動や作業学校運動に参加したハンブルクの民衆学校教師たちは、既存の学校内改革に不十分さを感じ、「新しい学校」の設立を望んだ。ヴァイマル期に入って学校改革要求は受け入れられ、1919年には実験学校の創設が認可された。ベルリナー・トア校、テレーマン街校、ブライテンフェルダー街校、ティロー南校などが相次いで設立され、ハンブルク学校改革運動を通じて醸成された教育思想の大枠を共有しつつ、それぞれ独自の主導理念に基づいた教育実践をおこなった。

実験学校には校区指定がなく、教員の募集、カリキュラム作成、学校運営方針の決定などを学校内でおこなうことができた。例えばベルリナー・トア校では、クラスごとに毎月一回以上の「保護者の夕べ (Elternabend)」を開催し、保護者と連携しながら学級を運営することが定められた。学校全体にかかわる問題については、教師、保護者、子どもの三者から成る「学校委員会 (Schulausschuß)」で協議することとされた。また、夕方には「活動共同体 (Arbeitsgemeinschaft)」と呼ばれる成人向けの学習会や催しを開催し、保護者を学校に引き寄せ、子どもや保護者とともに学校共同体をつくりあげようとした<sup>6</sup>。

これらの実験学校は、ナチズム期に衰退するまでの約十五年間にわたり、ハンブルク学校改革運動のなかで練り上げられた「子どもから」の教育 (Pädagogik "vom Kinde aus") の実現を志向し、国内外からの注目を集めた。

## （２）中等教育段階：リヒトヴァルク校

実験学校として学校改革運動の成果を実証しようとしたのは、民衆学校がほとんどであった。だが、中等教育段階の教育改革が軽視されたわけではない。学校改革運動を展開した民衆学校教師たちは、彼らの理念や理想を中等教育段階にまで広めることを望んでいた。中等教育学校の教師のなかにも、青年運動や田園教育舎での経験を有し、公立学校改革をめざすものが存在した。彼らはハンブルク最大の教員組合「祖国の学校・教育制度の友の会」に加入し、民衆学校教師たちとともに統一学校運動を展開し、新しい授業のあり方を構想した<sup>7</sup>。

リヒトヴァルク校に集まった改革志向の強い中等教育学校教師たちの世界観や政治的信念は多岐にわたり、各々が関心を寄せる事柄も異なっていた。教師たちはそれぞれに個性が強く、自らの信条にこだわりを持っていた。だが、当時の社会に対する批判的観点を重視した教育を模索し、授業を変革しようとする姿勢は共通していた<sup>8</sup>。彼らにとって教育とは、現存する知識体系を伝達することではなく、現代ならびに近未来の社会状況の的確な把握や認識を支援することであった<sup>9</sup>。

このような学校像を基盤としながら、ハンブルク唯一の中等教育段階の実験学校と認められたのが、リヒトヴァルク校であった<sup>10</sup>。ハンブルク教育行政を担う上級教育局が、ヴァイマル期に構想された新しいタイプの中高等学校であるドイツ高等学校（Deutsche Oberschule）のモデル校を探しているとの情報を得た教師たちは名乗りを上げ、1921年に実験学校の看板を掲げた。リヒトヴァルク校では「作業学校」原理と「共同体」思想が強調されるとともに、「ドイツ文化」が教育内容の中心に位置づけられた<sup>11</sup>。リヒャート改革によって生まれたドイツ高等学校では、とりわけドイツ文化を重点指導領域とし、ドイツ科（Deutschkunde：ドイツ語、歴史、地理、哲学、宗教など）に多くの時間数を割く一方、外国語をあまり扱わないという特色を与えられたからである。

しかしながらリヒトヴァルク校では、形式上はドイツ高等学校をモデルとしながらも、教師たち自身の理念や理想に即した教育活動を展開しようとしていた。とりわけそれは、リヒトヴァルク校における教育の第一の特色として挙げられる授業科目がドイツ科ではなく、文化科（Kulturkunde）であったことに表れている。文化科は、ドイツのことばかりを教えるのではなく、諸外国にも目を向けながらドイツ文化について、あるいは外国文化について客観的に多面的にとらえることをめざした総合科目であった<sup>12</sup>。知識を重視した教育や、職業準備だけに焦点化した教育を排し、生き生きと活動する子どもを育てようとしたのである。

## ２ リヒトヴァルク校における保護者や地域との連携

### （１）保護者に求められた役割

ドイツ公教育史を概観すると、学校の外的側面の管理主体は18世紀に、教会から国家へと移行した。しかし、教育の内容面では19世紀に入っても教会からの影響を大きく受けており、これをどのように改善するかが当時の公教育制度の課題であった。その解決策として考えられた方向性は、クロスや三枝によれば、以下の二つであった。すなわち、教育の外的側面と同様に内的側面についても国家に管理を委ねていくか、あるいは、保護者の教育権を承認しつつ学校ごとに保護者や教師が協働して管理していくか、という考え方である。このうち後者の立場から、教師の教育権の主張と連動させながら学校管理のあり方を

模索していったのが、ハンブルク学校改革運動であった<sup>13</sup>。

このような歴史的背景のなかで成立した他の実験学校と同じく、リヒトヴァルク校においても、教師と子どもと保護者の三者が協働し、それぞれが当事者意識をもちながら学校のあり方を決していくという学校共同体思想が根本にあった。リヒトヴァルク校に校区指定はなく、ハンブルク市全体から生徒を受け入れていた。入学生の四分の一ほどは改革志向の強い民衆学校を卒業した者であり、保護者には実験学校の理念や実践に対する理解があった。ハンブルク学校改革運動との密接な関わりを持ち続けたリヒトヴァルク校の教師たちにとって、民衆学校卒業後も実験学校に子どもを通わせようとする保護者は、重要な支持者であると同時に、教育理念を共有する存在でもあった。保護者との共通理解を深めるべく、各クラスで保護者の夕べを開くとともに、個人面談や家庭訪問、授業参観などの機会が設けられた。

ペーターゼン自身も述べているように<sup>14</sup>、保護者の関心事は多岐にわたり、保護者から提起される内容は教育問題に限定されるものではなく、教師側で協議の方向を修正する必要が生じることもあった。礼儀正しく、「子どものために」という意志をもって保護者に接し、保護者と教師の間に隙間を作らない努力が、教師には求められた。郊外に新設された私立学校のような特殊状況下での実験ではなく、公立学校という枠組みのなかで学校改革を目指したリヒトヴァルク校では、日常的に保護者からの幅広い支持を得ながら教育実践を進めていくことが重要だったからである。

保護者に課せられた学校共同体での役割は多種多様であった。保護者新聞「リヒトヴァルク校」の刊行（月一回、50ペニヒ）、保護者コーラス部の結成、クラス旅行の付き添い、学校への物理的な援助などであった<sup>15</sup>。さまざまな機会を通して学校にかかわり学校を協同管理する存在として、また、広報活動においては学校を代表する存在として、保護者には大きな期待が寄せられたのである。

## （２）グループ活動の指導

ペーターゼンが校長を務め、実験学校としての活動を始めた時期には、リヒトヴァルク校では学校における教育活動を、①全員が履修する「核となる授業（Kernunterricht）」、②自由選択の「コース授業（Kursunterricht）」、③放課後（午後）に設けられた自由参加のグループ活動（freiwillige Gruppe）の三つの柱としてとらえていた<sup>16</sup>。

このうちのグループ活動とは、スポーツ、手工芸、園芸、音楽、演劇、ダンスなどからそれぞれ子どもが好きなプログラムを選び、放課後に集団で取り組むものである。リヒトヴァルク校生だけでなく、他の学校に通う子どもにもグループ活動に参加する機会を設ける構想もあった。ドイツでは午後まで子どもが学校に残ることはめずらしく、それは現代においても変わらない。午後になったら子どもは帰宅するのが当然という「常識」に、リヒトヴァルク校ではあえて対抗し、午後にも子どもを学校にとどめ、教育活動をおこなった。当然、グループ活動の実施に対し、子どもたちを家庭生活から引き離すことになるという批判が寄せられた。しかし、リヒトヴァルク校の教師たちは、午後にも子どもを学校に留め置くことに意義があると考えた。なぜなら、当時の家庭や子どもの生活状況を見たとき、都市化が急速に進むなかで青少年の人間形成に欠かすことのできない自然や仲間との連帯が失われ、また、仕事の忙しい保護者が放課後の子どもの生活を充実させるのは難しいととらえたからである<sup>17</sup>。このように社会状況を把握したうえで、学校が多様な学習や活動の機会を提供しようとしたのである<sup>18</sup>。

ハンブルク学校改革運動における学校共同体の様相  
—ペーターゼン校長時代のリヒトヴァルク校を中心に—

グループ活動の指導にあたったのは、リヒトヴァルク校の教師だけではなく、教職志望の大学生がグループのリーダーとなって活動する場合もあり、その際のグループ活動の監督をリヒトヴァルク校の教師がおこなった。グループ活動に参加する大学生も学校共同体のメンバーとみなされた。大学生から見れば、グループのリーダーとして実際に子どもと関わる体験により、自らの適性を見極めることができ、学生時代に実践的な学習ができた。一方、リヒトヴァルク校から見れば、大学との結びつきが強くなるというメリットがあった<sup>19</sup>。子どもの午後の生活を充実するというだけでなく、それに関与する大学生や学校自体にとっても有効な試みとして、グループ活動は意義づけられたのであった。

### 3 リヒトヴァルク校を中核とする学校間の連携

#### (1) ヴィンターフーデ諸学校共同体の結成

諸学校共同体の結成への動きは、1920年秋、ヴィンターフーデにあるいくつかの学校から保護者協議会<sup>20</sup>の役員らが集まり、地域内の学校の連携について協議したことに始まる。学校ごとの会合では、校内で起こった問題など各学校独自の関心事を取り上げる傾向が強いが、その一方でハンブルクの学校教育制度の全体を見通した話し合いも必要であるとの考えが芽生えたからである。

また、民衆学校改革が進むなかで、その改革理念を広く推し進めようとするならば、中等教育学校にまで視野が広がる。この頃の中等教育機関への進学率はおよそ10～12%であり<sup>21</sup>、進学指導は民衆学校と中等学校とを架橋する最大の問題であった。さらに、民衆学校卒業後のルートとしての中等教育学校としてのみならず、民衆学校と高等教育機関との間に位置する学校としての中等教育学校に注目が集まった。ヴィンターフーデに存する八つの民衆学校が、子どもの進学先の一つとしてのリヒトヴァルク校と連携し、進学指導のみならず、それぞれの学校に共通する課題について協議する場として、ヴィンターフーデ諸学校共同体が結成されたのである。

#### (2) ヴィンターフーデ諸学校共同体の課題

1920年11月に設立されたヴィンターフーデ諸学校共同体は、翌月以降、リヒトヴァルク校長ペーターゼンを会長とする役員会を中心として、本格的に活動を開始した。設立後もない時期の諸学校共同体の課題は、会長ペーターゼンによって、以下の五点に整理された<sup>22</sup>。

##### ①初等教育の充実

それぞれに異なる子どもの才能を見極め、それぞれにふさわしい方法で伸ばしていくためには、初等教育の充実が欠かせないと考えられた。19－20世紀転換期に出された新しい教育学や心理学の知見を参照しつつ、民衆学校を中心に展開されてきたハンブルク学校改革運動を今後も推進する重要性が確認された。この主張は、②にも連動する。

##### ②作業学校理念の実現

改革教育運動のなかで提示された「作業学校」理念に即した教育を推進するには、中等教育学校から取り組むのでは遅すぎるとみなされた。民衆学校入学直後から、子どもの自己活動を第一原理とする教育活動をおこない、子どもを馴染ませることによって、真に作

業学校理念は実現されると考えられたのである。

このとき、保護者の理解と賛同が鍵となった。作業学校理念やそれに基づく教育活動がいかなるものであるかを理解し、子どもたちのために進んで諸学校共同体に参画する保護者の共同体意識の醸成がめざされた。

### ③中等教育学校への進学

統一学校構想が広まるなかで、初等教育と中等教育の連続性について考えなければならぬとされた。

### ④女子教育

ヴィンターフーデでの女子中等教育学校の創設が近年中には実現しそうにない状況のなかで、進学希望を持つ女子の扱いが問題となった。その際、男女共学の是非が大きな論点となった。

### ⑤保護者の結束

さまざまな課題に直面し、議論をしながら解決していくなかで、諸学校共同体は、この地域に住む保護者の精神的支柱として機能することが期待された。目の前にいる自分の子どもだけでなく、他校の子どもたちにも関心を寄せ、共通課題について話し合ううちに、逆に、個々の学校独自の問題が明らかになり、校内での教育論議も活発になると考えられたのである。

このうち④にかかわって、諸学校共同体の会合では、女子中等学校の設立要求が出された。と同時に、リヒトヴァルク校の理念やカリキュラムに対する保護者からの評価は高く、リヒトヴァルク校に女子を通わせたいという要望が強かった。当時リヒトヴァルク校では、ドイツ高等学校としての体制を整え、アビトゥーア受験資格取得のため9年制学校となることをめざしていた。上級段階の生徒数を確保したいというリヒトヴァルク校側にとっても、女子の入学許可は好都合であった。こうして1921年秋には、法的根拠がないため暫定的措置として、リヒトヴァルク校の上級段階に女子を受け入れる決定を下した。男女共学の導入は、結果的に、生徒どうしの人間関係や就職などに影響が及び、その後も男女共学についての議論は続いた。

上述した五点の他、中等学校卒業後を見据えた職業指導に関すること、リヒトヴァルク校の校舎新設などについても広く論議された。こうした課題が取り上げられ、論じられたことは、実験学校として誕生前後のリヒトヴァルク校にとって、地域や関連学校からの支援となり、上級教育局との交渉などに際して有利に働いたと考えられる。

## （3）諸学校共同体に対するペーターゼンの評価

ヴィンターフーデ諸学校共同体での経験をもとに、ペーターゼンは、諸学校共同体の有用性について論じている<sup>23</sup>。ペーターゼンによれば、従来、保護者と教師、初等教育（教員）と中等教育（教員）の間の交流が乏しく、断片的で限られた情報だけを頼りに互いを評価し、誤解しあっていた。それはさまざまな職業どうしの間においても言えることであった。しかし、保護者に焦点化して言うなら、各学校の保護者会に出席し、教師とともに学校の課題について話し合い、解決という共通目標に向かって努力を続けるなかで、協働

ハンブルク学校改革運動における学校共同体の様相  
—ペーターゼン校長時代のリヒトヴァルク校を中心に—

精神が芽生えてくる。さらに、同じ地区にある民衆学校と中等教育学校の保護者会（教師も含めて）が連携すると、長期的な課題や地域としての課題も浮かび上がってくる。進学、職業選択、スポーツ、遊び、野外活動施設などの課題について議論する場として、諸学校共同体の意義は大きい。その際、関係者が直接コミュニケーションをとり、連携を強めていくことが重要であるとペーターゼンは考えた。こうして諸学校共同体は、それぞれの子どもの教育にとどまらない、民衆教育に対する関心や関与を起点として、すべての人々が精神的にまとまるような共同体になると主張したのである。

以上より、ペーターゼンが諸学校共同体の活動の成果として重視したのは保護者の啓蒙であったことが読み取れよう。また同時に、その背景には、当時の社会における人間関係のあり方への問題意識があったことがうかがえる。

### おわりに

リヒトヴァルク校の教師たちは、自らの実践やその背景に有する理念や理想について、さまざまな媒体を通じて発信していた。教員組合「祖国の学校・教育制度の友の会」の機関紙『ハンブルク教師新聞』（週刊）だけでなく、カルゼンが編集していた雑誌『生活共同体学校』に、リヒトヴァルク校の教育目標や実践記録、あるいは生徒の作文を投稿した。主にハンブルクの教師を読者とする『ハンブルク教師新聞』を通じて実験民衆学校の実践内容が広められたことと比較すると、リヒトヴァルク校の様子はドイツ各地の教師や保護者に伝えられたことが分かる。また、日常的に参観者を受け入れ、丁寧に案内していたため、国内外からリヒトヴァルク校を訪れた人々が、その特色などについて多様な評価をし、リヒトヴァルク校の名声は高まった<sup>24</sup>。

こうした広報活動とならんで、本稿で取り上げた校内での保護者との連携、地域内の学校や保護者との連携を強めたことは、リヒトヴァルク校にとって二つの意味があったと考えられる。

第一は、ハンブルク学校改革運動との関連性の確認および強化である。リヒトヴァルク校では、教師と子どもや保護者の協力関係を結びながら学校を運営し、「学校共同体」としての特徴づけをめざした。19世紀末以降の運動のなかで主張された共同体学校思想を実現し、ハンブルクにおける改革教育運動の一翼を担っていることを表現したのである。

第二は、ヴァイマル期の中等教育改革のなかでの独自性の主張である。ドイツ高等学校のモデルに従う部分を最小限にとどめ、男女共学や統一学校などについて保護者や地域内の学校とともに議論し、「新しい教育」のあり方を提示していった。中等教育改革をさらに推進する先駆的な学校としての位置づけの明確化を図ったと考えられる。

本稿では、リヒトヴァルク校における「共同体」が、具体的な組織の名称として利用されるとともに、学校の特徴を効果的にアピールするためのキーワードであったととらえた。改革教育運動のなかで打ち出され、重要視された「共同体」概念は、複合的な意味を有している<sup>25</sup>。ペーターゼンにおいても「共同体」は、学校を協同管理・運営していく具体的な組織形態を指す言葉であったり、人間が生きていくうえで必要な他者とのかかわりを積極的に評価するための言葉であったりする。こうした多層的な意味内容を整理し、また、リヒトヴァルク校における子ども集団（学級）の様相についても検討したうえで、ペーターゼンの「共同体」概念をとらえていく必要があるだろう。

註

<sup>1</sup> ペーターゼン, P./三枝孝弘/山崎準二『学校と授業の変革——小イエナ・プラン』明治図書, 1984年, 92ページ。

<sup>2</sup> 学校改革同盟は1915年より「ドイツ教育・教授委員会」と改称した。

<sup>3</sup> この時期の学校の名称は「ヴィンターフーデ実科学校」であり, 1921年初頭にハンブルク芸術教育運動の推進者リヒトヴァルク (Lichtwark, A. 1852-1914) にちなんで「リヒトヴァルク校」と改称した。本稿では, 改称以前の, 学校改革を志向する教師たちが集まり, 実験学校としての地位を確立していく時期についても, その内実の連続性が認められると判断し, 「リヒトヴァルク校」と呼ぶこととする。

<sup>4</sup> Kluge, B.: Peter Petersen. Lebenslauf und Lebensgeschichte. Auf dem Weg zu einer Biographie. Heinsberg 1992, S.111-120.

<sup>5</sup> 対馬達雄「ペーターゼンにおけるゲマインシャフトの理念と学校共同体の形成」, 『教育学研究』第54巻第2号, 1987年所収, 1ページ。

<sup>6</sup> ベルリナー・トア校における教育活動の詳細については以下を参照。拙稿「ハンブルク学校改革運動における『子どもから』の教育学——民衆学校教師の存在基盤としての意味内容」, 『教育哲学研究』第79号, 1999年所収。

<sup>7</sup> 実験学校設立後も, 「祖国の学校・教育制度の友の会」の他, 実験学校となった民衆学校やリヒトヴァルク校, ならびに改革志向の学校によって構成される「ハンブルク諸学校共同体 (Hamburger Schulengemeinschaft)」において, 学校改革運動を担う教師たちの連携は強められた。

<sup>8</sup> Heine, G.: Die Hamburger Lichtwarkschule (mit einer Vorbemerkung von A. Leschinsky). In: Zeitschrift für Pädagogik, 32.Jg., Nr.3, 1986, S.332.

<sup>9</sup> Kappe, R.: Was will die LICHTWARKSCHULE? Leitsätze aus einem Referat [1924 oder 1925]. In: Arbeitskreis Lichtwarkschule (Hrsg.): Die Lichtwarkschule. Idee und Gestalt. Hamburg 1979, S.36.

<sup>10</sup> ドイツ全土を見渡せば, 当時, リヒトヴァルク校と同様に中等教育段階で改革教育思想に基づく実験的实践をおこなった学校として, シェルフェンベルクの学校農園島, ベルリンのカール・マルクス校, マグデブルクのベルトルート・オットー校, リューベックの教会附属学校があった (Lehberger, R.: Die Lichtwarkschule in Hamburg. Hamburg 1996, S.4.)。

<sup>11</sup> Wendt, J.: Pädagogische Einflüsse der Lichtwarkschule in Hamburg und ihre Wirkung nach außen. In: Lehberger, R. (Hrsg.): Nationale und internationale Verbindungen der Versuchs- und Reformschulen in der Weimarer Republik. Beiträge zur schulgeschichtlichen Tagung vom 17.11-18.11.1992 im Hamburger Schulmuseum. Hamburg 1993, S.70.

<sup>12</sup> リヒトヴァルク校の文化科については以下を参照。拙稿「20世紀初頭ハンブルクにおける公立実験学校の特質——リヒトヴァルク校を例として——」, 中国四国教育学会『教育学研究紀要』第44巻第一部, 1998年所収。

<sup>13</sup> 三枝孝弘「イエナ・プランの研究——ドイツにおける学校の協同体的自主管理に関する思想および運動の序論的考察」, 『岡山大学教育学部研究集録』第18号, 1964年所収, 4 - 6ページ。

<sup>14</sup> ペーターゼンほか『学校と授業の変革』, 95ページ。



ハンブルク学校改革運動における学校共同体の様相  
ーペーターゼン校長時代のリヒトヴァルク校を中心にー

<sup>15</sup> Lehberger,R./ Wendt, J.: Die Lichtwarkschule in Hamburg. Eine höhere Reformschule der Weimarer Republik mit kulturkundlicher Prägung. In: Pädagogik, Nr.2, 1995, S.49.

<sup>16</sup> ペーターゼンが校長を辞して以降,「核となる授業」や「コース授業」は廃止され,それぞれの学級での担任教師を中心とする授業が重視されていった。

<sup>17</sup> 時期はずれるが,1924~1932年の入学者名簿をもとに保護者の職業を調べると,商業24%,会社員21.6%,教員14.4%,研究者11.6%であったという(Henningsen,G.: Wie wurde man Lichtwarkschüler? In: Arbeitskreis Lichtwarkschule(Hrsg.), a.a.O., S.58)。

<sup>18</sup> Der Lehrkörper der Lichtwarkschule am Stadtpark: Die Lichtwarkschule. Erreichtes und Gewolltes [1921]. In: Arbeitskreis Lichtwarkschule(Hrsg.), a.a.O., S.26-27.

<sup>19</sup> a.a.O., S.25.

<sup>20</sup> 1920年4月に公布された「学校の自主管理に関する法律」により,ハンブルクの学校は教師団と両親協議会の協働による自主的管理下に置かれることとなった。

<sup>21</sup> 1920年の調査によれば,ヴィンターフーデにある民衆学校(教員数188名)に通う子どもが5814名いることから,これに中等学校進学率10~12%をあてはめると,中等学校在籍者数はおよそ600名となる(Der Lehrkörper der Lichtwarkschule am Stadtpark, a.a.O., S.179.)。なお,ヴィンターフーデにはリヒトヴァルク校の他にも,ヨハンノイム(1529年創立のギムナジウム)等の中等教育学校が存在した。

<sup>22</sup> Petersen,P.: Innere Schulreform und Neue Erziehung. Jena 1925, S.187-188.

<sup>23</sup> a.a.O., S.189-190.

<sup>24</sup> Wendt,J., a.a.O., S.70-79.

<sup>25</sup> Weiß,E.: “Gemeinschaftserziehung” – Bemerkungen zu einer zentralen “reformpädagogischen” Kategorie. In: Archiv für Reformpädagogik, 2.Jg., Heft 2, 1997, S.42.

## 主要参考文献

Arbeitskreis Lichtwarkschule(Hrsg.): Die Lichtwarkschule. Idee und Gestalt. Hamburg 1979.

Bracht,H.-G.: Das höhere Schulwesen im Spannungsfeld von Demokratie und Nationalsozialismus. Frankfurt am Main 1998.

de Lorent,H.-P./Ullrich,V. (Hrsg.): Der Traum von der freien Schule. Schule und Schulpolitik in Hamburg während der Weimarer Republik. Hamburg 1988.

Gudjons,H./Lehberger,R.: In Hamburg zur Schule gehen. Ein Führer durch Aufbau und Geschichte des Hamburger Schulwesens. Hamburg 1998.

伊藤暢彦「教育原理としてのゲマインシャフト」,大谷大学哲学会『哲学論集』第40号,1993年所収。

Kantwill,W.: Neuere Geschichte des hamburgischen Schulrechts. Frankfurt am Main 1995.

Kloss,H.: Lehrer Eltern Schulgemeinden. Der Gedanke der genossenschaftlichen

- Selbstverwaltung im Schulwesen. (Hrsg. und kommentiert mit pragmatischer Bibliographie von Rudolf W. Keck), 2.Aufl., Hildesheim 1981.
- Kluge,B.: Peter Petersen. Lebenslauf und Lebensgeschichte. Auf dem Weg zu einer Biographie. Heinsberg 1992.
- Lehberger,R.(Hrsg.): Die Lichtwarkschule in Hamburg. Das pädagogische Profile einer Reformschule des höheren Schulwesens in der Weimarer Republik. Darstellung und Quellen. Hamburg 1996.
- Petersen,P.: Innere Schulreform und Neue Erziehung. Jena 1925.
- Rödler,K.: Vergessene Alternativschulen. Geschichte und Praxis der Hamburger Gemeinschaftsschulen 1919-1933. Weinheim und München 1987.
- Stach,R.(Hrsg.): Lebensgemeinschaftsschule. Theorie und Praxis. Lesehefte zur Jenaplanpädagogik. Heinsberg 1987.
- 対馬達雄「ペーターゼンにおけるゲマインシャフトの理念と学校共同体の形成」,『教育学研究』第54巻第2号,1987年所収。